

ノソング氏はコンゴブラザビル教会4代会長として、1975年から2000年まで務めた。この25年という歳月は、50年のコンゴ伝道(1960年に二代真柱がコンゴへ初めて足を踏み入れてから数えて)から言うなら、その歴史の中で半分はノソング氏の時代であった。この間に教会本部側では、4代会長就任と同時に開設されたコンゴブラザビル出張所の所長は4人交代(高井猶久、高橋茂男、堀内和蔵、高部正雄)し、アフリカ課長は6人(篠森靖人、畑林清次、紺谷久則、村上忠男、高部正雄、高橋利行)、そして海外布教伝道部(海外部)長は5人(畑林清次、山添理一、篠森靖人、飯降政彦、寺田好和)交代している。本部直属であるコンゴブラザビル教会にとって、海外部は本部の「窓口」として共に「親」の立場でもある。ノソング氏はつまり、延べ15人の「親」たちとコンゴ伝道に関して話し合いをする機会があった。諸事情によりコンゴ行きが実現しなかった寺田部長以外は全員コンゴまで出向いている。

本部側(海外部)とノソング氏との話し合いでは、コンゴ人信者の帰参に関する人選や日程、またおちばからの派遣布教師の任期といったその時々議題を除けば、大きく二つの問題が常に繰り返されてきた。一つが「会長としての務め方」であり、もう一つは「教会の会計」に関する事だった。

会長の務め方に関してよく言われたことは、「おつとめの時間厳守」や「会長自身が率先して、にをいがけに励み、おたすけに回る」また「商売をしない」「信者から慕われる人になる」といったものが多かったのではないだろうか。一言で言うなら「もっと会長らしく務める」ということだった。一方、会計に関しては、会計報告の提出やノソング氏の借金の問題、そして教会の経済的自立に関する事が多かった。

話し合いの席で、本部側の責任者がそれぞれに親心でもって、ノソング氏を導こうと尽力したことは言うまでもないだろう。しかし、繰り返されてきたこれらの話は、まさに「繰り返された」ことが証明するように、話し合いは常に平行線を辿り続けたと言える。その原因はさまざま考えられるだろうが、その最も根本的なところは双方の比較の対象の相違ではないだろうか。そしてその背景には、日本とはさまざまな面で異なるコンゴでの布教伝道の現状も考慮する必要があると思われる。

ノソング氏はコンゴブラザビル教会長であると同時に、コンゴ社会においては天理教の「代表者」でもあった。彼が会長を務めていた時代は、7つの宗教しかコンゴ政府から公認されていない。それはカトリック、プロテスタント、イスラム、救世軍、キンバングスム教会、ラシーゼフィラン教会、そして天理教である。これら7つの宗教団体が政府行事に招待される場合は、同列に置かれるわけで、ノソング氏はそれぞれの宗教の長と「同格」と見なされる。国民の半数が信者というカトリック、首都だけでも数十カ所以上の教会があるプロテスタント諸派、またコンゴ在住の北アフリカ系移民が信仰するイスラム、さらには信者数が万単位である現地の宗教の代表者と、ノソング会長は肩を並べ、また彼をそのように認識する社会の目があった。

このような背景の中で、ノソング氏が「会長らしく」と言われても、天理教の一般的「教会長」のモデルが存在しないコンゴでは、イメージするのが難しかったのではないだろうか。コンゴにおける天理教はブラザビル教会ただ一つであり、会長は

ノソング氏だけである。しかもノソング氏がおちばがえりの中で接した天理教の会長とは、本部直属の教会長クラスであり、その多くが大教会長であった。一方、話し合いの席で「会長らしく」と言う場合、「会長自身が率先して、にをいがけに励み、おたすけに回る」と繰り返されたように、それはより一般的な教会を想定されており、また日本からコンゴへ派遣された日本人布教師像と重なっている。しかし、常にコンゴにいる彼にとって「会長」すなわち「Chef」と言えば、前述のようにコンゴ社会の中で認められた世界宗教と同等であり、それが比較の対象となってしまう。コンゴ社会において、例えばカトリックの最高責任者が、戸別訪問や路上でゴミを拾う姿は考えられない。運転手付きの高級車に乗り、多くの信者が待ち受ける中を、最後の登場者として現れる「Chef」の姿は目にしても、住宅街を練り歩き、教会に来た信者たち一人ひとりに声をかけるような姿は、彼の「Chef」像にはなかっただろう。

話し合いのもう一つのテーマであるお金の問題も、同様の背景があると思われる。コンゴブラザビル教会は本教において、本部からの経済的助成で成り立っている唯一の教会である。したがって、経済的自立が教会の前提条件となっている観点からすれば、そうした教会と比較され「経済的自立」が促される。一方、コンゴでは、外国から入ってきた教会のすべてが、その本部あるいは他の教会やコミュニティからの寄付や援助によって活動が続けられている。さらに、さまざまな営利活動(ホテル経営やトラック輸送、農園、診療所など)から得られる利益を資金源として布教推進の一部としているところも少なくない。このような中で、双方に考え方の相違があったとしても致し方なかっただろう。それは比較の対象の相違によるもので、それが教会活動のための資金や専従者の手当に関して考え方が食い違い、話し合いが平行線を辿る結果となっていったのだろう。ノソング氏が無償であった憩の家診療所を有料化しようとしたことや、彼が行っていたトラック輸送による商売がコンゴ伝道の上で問題となったことも、このような背景があるのではないだろうか。

話し合いで何度も繰り返された教会の会計報告に関しても、確かに本部予算に依存しているので本部に報告するのは当然のことであろう。しかし、ノソング会長時代、会計処理ができる教会スタッフは、派遣日本人布教師以外誰もいなかったのも事実である。ノソング氏自身も読み書きや収支計算はできなかった。実際、常駐の日本人布教師がいなくなって以降、海外部からの再三の要求にもかかわらず教会から会計報告が出されることはなかった。

ノソング氏は会長時代、話し合いの結果次第では、突然辞意を表明したり、おつとめの心をとらなかったり、そうかと思えば会長職に固執したりすることが多々あった。おちばがえりを要求するかと思えば拒否したり、後継者を指名するかと思えばそれを否定したりなどと、その言動は常に一貫性に欠けていた。半世紀に亘る歴史の半分以上は、彼のこうした言動に振り回されたとも言えるかもしれない。しかし、本部との話し合いの席では、彼は毎回異なる「親」と接しなければならず、そしてその入れ替わる「親」たちの側に、コンゴ伝道に対する考え方、またノソング氏に対する接し方や育て方に、一貫性があったかどうかとも考えてみる必要があるのではないだろうか。